青い旗の下で

七七日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青い旗の下で

【Ｎコード】
Ｎ２６５８Ｖ

【作者名】
七七日

【あらすじ】
夜の学校の体育館、奇妙な場所で奇妙な出会い方をした二人はバンドを結成しようと動き出す。

出会い

「わかったな！」
ドスの利いた声でそう放つ少女。
「あぁ……」
かすれた声を出した少年の名は六角徹。夜の学校の体育館、目の前にはクラスメートの少女。そして透はその少女に現在、制服の胸倉をつかみ上げられている。自分より身長の低い物に胸倉を掴まれているため徹の体は微妙な位置で停止していた。
なぜこんな時間に、こんな場所で胸倉を掴まれているかというと……、それを今から語っていこう。

部活にも同好会にも所属していない徹は放課後に暇を持て余した。真っすぐ家に帰るのはなんだかもったいない気がして友人と本屋やCDショップをだらだらと見て回っていた。
「そろそろ、帰るかぁ」
友人がそう呟いた。携帯を開き時刻を確認すると午後七時を過ぎようとしていたところだった。
「そうだな」
徹はそう言って自分の自転車に跨った。
二人は互いに「じゃあ」と短く挨拶をしてそれぞれ帰路につこうとした。
自転車に乗りながら痒くなった首筋を掻いていたとき徹は何処か物足りなさを感じた。
「あ……、ない」
今朝は確かに付けていたネックレスが現在徹の首にはなかった。何処で外したのか今日一日を振り返ってみた。
（ああ、そうだ、体育のとき邪魔だから外したんだっけ）
その事を思い出し少し面倒だと感じたが一旦学校に取りに戻るこ

とにした。
日は完全に沈み夜の学校は不気味な雰囲気を放っていた。誰もいない学校内を徹は心細く一人で歩いた。体育館に着き、重い扉を音をたてないようにゆっくりと開けた。
（確か、ステージの上で休憩しているときに……）
今日の体育はフットサルだった。試合をしていない間は邪魔なのでステージに上げっていることになっていた。
「あった、あった」
ステージの端の方、自分が休憩していた場所にそれは確かにあった。失くさないようにすぐに首に着けた。
用事も終えてさあ帰ろうと思った矢先に。キィィーと体育館の扉があく音が聞こえた。
（誰か来た？）
そう思った徹はなぜかとっさにステージ脇へと身を隠した。そして隠れてから、別にやましいことなどしていないのになぜ隠れたのか自分の行動を疑問に思った。
徹は薄暗闇の中入ってきた人物に目を凝らした。大方点検に来た警備員か教職員の誰かかと思ったが予想は外れた。入ってきたのは制服を身にまとった女生徒だった。光が少ないせいで顔までは判別できなかった。
こんな時間に何の用なのか、自分と同じ様に忘れ物でもしたのかと思っているうちに女生徒はステージへと歩み寄ってきた。そして軽やかにジャンプしてステージへと上った。
ステージ脇のカーテンの陰に隠れている徹は名乗り出るべきかどうか迷ったが、絶対怪しまれるだけだと思ったので隠れていることにした。
女生徒はステージ中央に立つといきなり声を張り上げた。
――あ・え・い・う・え・お・あ・お・か・け・き・く・け・こ・か・こ……

これは所謂発声練習というものなのだろう。それにしても綺麗な声だと徹は思った。
誰だろうか？　合唱部？　演劇部？　どちらにせよ練習熱心なことだ。今更出て行くわけにもいかない徹は彼女の自主練習に付き合うことにした。
発声練習を終えると彼女は歌を歌い始めた。静かな英詩の歌、徹の知らない曲だった。
休むことなく静かな曲を三曲、彼女は歌った。
しばしの休憩、彼女は水筒に入った水分でのどを潤した。
そしてまた、彼女は歌い始めた、先ほどとは打って変わった曲を歌い始めた。時折綺麗な声からは想像もつかないシャウトを発した。
まるでＳｌｉｐｋｎｏｔのようなシャウトだった。
気がつくと小一時間は優に経過していた。
さすがに疲れたのか彼女は肩で息をついていた。ふらふらした足取りでステージから飛び降りて体育館から出て行った。
さて帰ろう、と立ちあがったが念のため数分待つことにした。その間にじっとしたままだったせいで堅くなった体をほぐした。
体育館を出ると月が眩しいくらいに燦々と輝いていた。そして漂う白い煙。
（煙？）
視線を下に移すと先ほどの女生徒が学校敷地内にもかかわらず堂々と煙草をふかしていた。
徹と女生徒は互いに視線を合わせたまま固まった。
「なっ……！」
「えーと……」
月明かりの下、二人は互いに見知った顔だということに気がついた。
「お前、確か同じクラスの……なんだっけ、まあいい。……いつからいた？」

彼女は鋭い目つきで徹にそう問いかけた。
「ええと、まあ、始めから」
徹がそう言うと彼女はつかつかと歩み寄りいきなり徹の胸倉をつかみ上げた。
「言うなよ」
「え？」
「誰にも言うなよ」
「ああ、うん。他にも隠れて煙草吸ってる奴いるし」
「違う！」
「え？」
「私が、その……歌ってたことを」
（え、そっち？）と徹は心の中で突っ込んだ。
「わかったな！」
そして冒頭に戻る。
「あぁ……」
怯えた声を出した徹を鋭い眼光で睨みつける彼女――徹と同じクラスの中村菖蒲。
二人の出会いはそんな感じだった。

出会い（後書き）

まだあまり展開とか考えてないですが頑張って書いて行きます^^

感想、一言などありましたら気軽に残してってくださいー

呼び出し

夜の体育館で出会った二人、六角徹と中村菖蒲。二人はクラスメートだった。しかし二人は今まで接点もなく会話もしたことがなかった。

中村菖蒲に対するクラスメートの見解は所謂不良だった。着崩した制服、肩まである黒髪には前の方にすっと一筋の青いメッシュが入れられてある。教師には反抗的な態度でたまに授業もサボる。

二人が通う高校は県内ではまあまあの進学校だった。根がまじめな生徒が多いこの学校で異端である菖蒲に進んで近づこうとする生徒は少なかった、いや皆無といっていい。それゆえに菖蒲はいつも一人だった。

翌日、徹はいつも通りに学校に来た。昨日のことは少し驚いたが、あれはあれで終わり。今日からはまた菖蒲とは関わることはないだろうと思っていた。

徹は家が近いせいもあっていつも学校に来るのが速かった。教室にはまだ疎らにしか人はいない。それらの生徒と軽く挨拶を済ませ自分の席に着いた。

軽く教室を見回すといつも遅刻ギリギリに投稿するはずの菖蒲が既に教室にいることに気がついた。菖蒲は他人を拒絶するようにイヤホンを耳に着けて机に突っ伏して眠っていた。よほどの大音量で聴いているのか音漏れがひどく、徹のいる所まで聴こえてきた。

なんとなくその音に耳を澄ました。徹はそれが知っている曲だということに気がついた。

――Ｅｖａｎｅｓｃｅｎｃｅ。女性ボーカルのアメリカのメタルバンドだ。

徹は菖蒲のイヤホンから洩れるその曲を聴きながらまだ早いと思ったが授業の準備を済ましておくことにした。そうして机の中から

教科書を取り出そうとしたら折りたたまれた小さな紙がぽとりと床に落ちた。

『昼休み　屋上』

と、無骨な文字でシンプルにそう書かれていた。

昨日の夜のことさえなかったら、いったい誰だろう？　まさか告白？　と甘酸っぱい想像をめぐらす事もできただろうが、今の徹には思い当たる差出人は一人しか想像できなかった。今現在机に突っ伏している菖蒲である。

一体何事だろうか、昨日のことはもう終わりと高をくくっていたのだが……。今日珍しく早く来ていたのはこのメモを入れるためだろうか？

何のためにわざわざ人気のない所に呼び出されるのだろう？　そのことばかりが頭を巡り午前中の授業は全く頭に入らないまま昼休みを迎えた。

「よう」

徹が屋上に上がると既に菖蒲はそこにいた。微かな煙草の匂いが鼻に着いた。

「また吸ってたの？」

「んん？」

「いや、なんでもない……。ところで呼び出した理由は？」

徹はなるべく早く話を終わらせようとすぐに本題に入った。

「ああ……、お前、昨日は何で体育館にいたんだ？」

「いや、ちょっと忘れ物を取りに」

「忘れ物ってそのネックレスか？」

菖蒲の指さした先には徹の征服から僅かに覗くネックレスのチェーンがあった。普段学校内ではネックレスは制服の内側にしていた徹だった。小さなアクセサリーでもうるさく言う教師がいるからで

ある。
「そう、だけど……？」
「ちょっと、出して」
理由が分からなかったが徹は言われた通りネックレスを表に出した。
「それってギターのピック、だよね？」
徹は頷いた。
「父さんが作ってくれたんだ。父さんが昔行ったライブ――アーティストの名前は忘れたけど――でギターの人が投げたのをキャッチしたんだって。それで記念にネックレスにしたらしいよ」
「ふーん、お前は、ギターやってるのか？」
「……まあ趣味程度に」
「軽音部とかには？」
「いや、帰宅部」
「……」
菖蒲は急に腕を組んで何やら考え始めた。そして「よし！」そう言って徹の肩に手を置き、続けてこう言った。
「バンド、やろうか」
「……え？」
「だから…バンド」
よほど勇気を振り絞って誘ったのか菖蒲の顔は仄かに紅潮していて、手も僅かに震えていた。
「バンドって、ギターがいてボーカルがいてドラムがいて……って、そのバンド？」
「そう、ギターがいてボーカルがいてドラムがいてベースがいる、そのバンド」
「そんな、なんでいきなり……」
「お前、見ただろ」
「見たって……？」
「私が歌ってるところ」

「いや、見たけど……」
「責任とれよ！」
菖蒲はそう言い残しダッシュで屋上を後にした。
徹は突然の出来事にぽかんと屋上で呆けていた。
こうしてまだメンバーは二人だが徹と菖蒲のバンドが結成された
……？

バンド

バンド結成宣言の放課後、菖蒲は徹にそっとこう耳打ちした。
『八時、体育館』
徹が何か言いかけようと振り返ったときにはもう菖蒲は教室を後にしていた。
行くか、どうするか、迷いながらも結局行くことになるだろうなと徹は思った。なぜって後が怖いから。そんな情けない自分に泣きそうになった。
一旦家に帰り、いつもどおりくつろぎながら八時近くになると「何処に行くの？」という母親にたいして「ちょと、そこまで」と言葉を濁し、再び学校へと赴いた。
こんな遅くまで部活をする熱心なところはなく、学校はシンと静まり返っていた。そんな中、緊張しながら徹は体育館へ向かった。
現在八時七分。少し遅刻してしまった。
そっと扉を開けたが建てつけが悪いせいか、古いせいか、キィーと音が鳴ってしまった。
「遅い！」
とステージの方から菖蒲の声が聞こえた。
ごめん、と謝りながら徹もステージの方へ向かった。
「また歌ってたの？」
「うん、まあ」
徹にはもうバレているにもかかわらず菖蒲は恥ずかしそうにそう言った。
「ところで、その。ご用は……？」
「……バンド、いいのか？」
「え？」
意味が良く分からず徹は思わず聴き返した。
「だから、バンド、組むことでいいのか？」

「ああ、うん。いいよ」
バンドを組むことは徹も今まで考えないわけではなかった。一人でギターを弾くのも飽きたりた感じになってきたことろだった。しかし今更軽音部に入るのも気が引けたし、楽器をやっている友達もいなかったからバンドを組もうと行動を起こしてはいなかった。
ただ徹は菖蒲とは今まで関わりがなかったし、クラスでは余り評価が良くない。うまくやっていけるかが少し気がかりだった。
「あ、ありがと」
たどたどしくお礼を述べる菖蒲に対して徹の意識は少し変わった。クラスでは浮いていて不良などと言われているが、ただちょっと不器用で人付き合いが苦手なだけかもしれないと徹は思った。
「どういたしまして」
「それで、メンバーだけど……」
「ええと、僕がギターで――ギターしかできないし――。中村さんはヴォーカルでいいんだよね？　」
「うん。あと、菖蒲でいい。名字で呼ばれるのはなんか嫌いだから」
「ああ、うん……菖蒲さん」
徹はいきなりのこと戸惑いながらもそう呼んだ。
「……まあいいや。徹、だっけ？」
徹は頷いた。
「ギターとヴォーカルが今いて、後はベースとドラムだね。ギターがもう一人いてもいいけど」
「心当たりはあるのか？」
「いや、菖蒲さんは？」
「いや……」
その後、話し合った結果。兎に角、早くバンドとしての活動をするべく最低後二人のメンバーが必要だということで、それぞれ一人メンバーを集めてこようということになった。
どうせならドラムかベースか担当を決めようということで、じゃんけんで買ったらベース、負けたらドラムを探すということになっ

た。なぜならドラムの方の人口が少ないと思ったからである。結果、徹パー、菖蒲グー、で徹がベースを、菖蒲がドラムを探すということになった。

その後もう少し歌っていく菖蒲に「見ていていい？」という徹の提案はあっさり却下された。しかし徹は体育館の扉の向こうに留まりちゃっかり聴いていたのである。やはり、美しい声だと徹は再び思った。

ベーシスト

「ベース、かぁ……」

友達にベースを弾いているやつはいない。クラスにはもしかしたらいるかもしれないが、少なくとも透は知らなかった。

授業が始まる前に、今は少し疎遠になっている中学校時代の友達何人かにメールを送ってみた、が帰ってきた答えは芳しくないものばかりだった。

玄関前にある掲示板にメンバー募集の張り紙でもしてみようかと一瞬考えたが、お堅いこの学校では許可が下りるとは思わなかったし、そんな目立つことは菖蒲が嫌がるだろうなと徹は思った。

うーむ、どうしようか、最終的に軽音楽部の人に助っ人を頼もうか……。

あまりいい案が浮かばないまま昼休みが訪れた。

教科書を机にしまうとクシャっと紙か何かが潰れる音がした。手で机の中を漁ると折りたたまれた一枚のメモ用紙。そのとき「またか……」と徹は思った。中を開くと丸い文字で、

『昼休み　屋上』といつぞやと同じ文面。

ふう、小さな溜め息をついて、開けかけた弁当箱をしまい透は屋上へと向かった。

扉を開き屋上へと上がった。微かな煙草の匂いが鼻をつついた。しかし、菖蒲の姿は見渡す限り見えなかった。

「菖蒲さーん」

と徹ははフェンスに向かって歩きながら呼びかけた。

「やあ」

横からいきなりそんな声が聞こえて徹はびくりと身体を震わせた。

現れたのは煙草を咥えた見知らぬ女生徒。

「……誰、ですか？」

肩より少し長い真っすぐでさらりとした黒髪。顔の半分が隠れる

くらいに長い前髪を少しかき分けて彼女は言った
「あれ？　手紙、呼んでくれたんじゃなかったの？　ああ、そう言えば名前書いてなかったかも」
彼女は器用に煙草を咥えたままそう言った。
「手紙……」
そう言えば、今思い返してみれば菖蒲の字の形とは全く違っていたように思う。
それはそうと、面識もない女生徒がいったいなんの様なのだろうか？　訝しみながら徹は尋ねた。
「あの、何か用ですか？」
「君達……、ええと六角君と中村さん、バンド組むんでしょ？　それで、もしよかったらベースで入れてくれない？」
「えっ？」
いきなりのベース参上に徹は言葉を失った。なぜ学年も組も名前もわからない女生徒がいきなりバンドに入れてくれと頼むのか、それ以前になぜ徹と菖蒲がバンドを作ろうとしていることを知っているのか、徹は訳が分からなかった。
「ああ、なんで知ってるのかって顔だね。実はたまにここで、まあこれやってるの」
そう言って女生徒は右手の煙草を顔の高さまで掲げ、言葉をつづけた。
「それで昨日君達二人の会話が否応なく耳に飛び込んできて、それでちょうど私ベースやってるし、なんか君達のキャラ面白いし、それで仲間に入れて貰おうとおもったの」
一応は事の次第が納得できた透は少し冷静を取り戻した。
「……ちょうどベース探してたところだったし、大歓迎だけど、楽器やってたんなら軽音楽部とかには入っていなかったの？」
「あー……、一応軽音楽部には今も所属してる？　のかな。ただ全然顔をだしてない、所謂幽霊部員ってやつです」
「え？　どうして？」

「だって、この学校の軽音楽部ときたら普段は適当に音鳴らして遊ぶか、喋ってるだけで、唯一真面目にやる時といえば年に一回の学園祭のライブのために適当に受ける曲を数曲コピーするだけ。そんなんじゃなくて私は真剣にバンドがしたかったの。そろそろ外でメンバー探してバンド作ろうと思ってたときに君達の声が聴こえてきたってわけ」
「はあ……」
一気に長台詞を並べられ、徹はそんな間抜けな返答しかできなかった。
「で、バンドに入っていいのかしら？」
「あ、うん。僕は大歓迎だけど。今度菖蒲さんにも紹介するよ」
「ありがとう」
彼女は優しくそう言った。長い前髪から覗く彼女の笑顔に徹の鼓動はどきりと一瞬高鳴った。
「えっと、君の名前は……？」
「私は一ノ瀬珪。一ノ瀬なりケイちゃんなり好きに呼んでくれていいよ。あ、クラスは二年D組。よろしくね」
「B組の六角徹です。よろしく」
「うん、しってる」
珪は悪戯に笑ってそう言った。
こうして不意にも徹はベーシストとの遭遇を果たした。

ドラマー

「ドラム……」

菖蒲も徹と同様にドラマをやっている知り合いなど皆無、心当たりもさっぱりなかった。

といっても菖蒲は昔から人見知りが激しく、人付き合いも苦手だったため、知り合いと呼べる者すら少なかった。

どうしよう……、朝からその言葉だけを頭を往復していた。結局、学校が終わるまでにはじき出した『どうしよう』の結論は、最終的に見つからなかったら徹に探させよう、だった。

釈然としないまま菖蒲は家路に着いた。

「ただいまぁ……」

気力のない声でそう言いながら家のドアを開けた。すると玄関に見慣れない靴があることに気がついた。

居間に入ると母と談笑を交わしている後ろ姿の女性の姿があった。彼女は入ってきた菖蒲の姿を認めると、

「あら、菖蒲ちゃん。久しぶりね」

彼女は母の一歳年上の姉、つまり菖蒲の叔母にあたる人だった。

「あ、どうも」

「お帰りなさい。あ、土産のプリンあるけど、食べる？」

「……いただきます」

叔母は菖蒲の以前とは違う格好――着崩した制服、メッシュの入った髪――を見ても特に何の反応も見せず屈託のない態度だった。

その理由を菖蒲はすぐ知ることになった。

もらったプリンとスプーンを持ちテレビの前のソファーに向かうとすでに先客がいた。菖蒲は一瞬「誰だこいつ？」と思ったが振り向いた彼の顔を見て思い出した。

「ナオ……？」

「そうだよ」

彼は片山直也、叔母さんの息子、つまり菖蒲の従兄。歳は同じだった。
直也を会うのは高校に上がってからは初めてだった。以前の直也といえば野球部で丸刈りだったのにも拘わらず、今の姿といえば金に近い茶髪を逆立てた髪型、両耳には大きなピアスがぶら下がっていた。
「お前、変わったなあ」
菖蒲は半ばあきれた声でそう言った。
「菖蒲こそ、なんか不良ぶってない？」
「実際に不良だのと陰口たたかれているよ」
「へぇ……」
お互い一年以上会っておらず、積もる話もあるかと思ったが、取り立てて離すようなことはなく、二人してプリンを食べながらテレビに流れるニュースを見ていた。
ニュースが野球の試合結果に変わったとき菖蒲はふと思いついて直也に尋ねた。
「そういえば野球はどうしたんだ？」
「……やめたよ、一年の途中に」
「そうか、今は何かやってないのか？」
「見て分からない？」
「……チャラ男？」
「なんだよ、チャラ男やってるって！　バンドだよ、バンド！」
「へぇ、バンドやってるのか、パートは？」
「ドラムだよ」
「ほう……」
ドラムという単語を聞き菖蒲の目が怪しく光った。
「バンド初めてどのくらいだ？　ライブとかやったのか？」
「まだ一年もたってないよ。ライブは、まあ、一回だけライブハウスで……」
「へぇ、どうだった？」

菖蒲はライブに出たことはもちろんなく、ライブに行ったことさえなかった。一度ぐらいはライブハウスを見に行こうと常々思ってはいたが中々足を進めれずにいた。
「……まあまあ、だったかな」
直也は声が小さくなり、余り思い出したくないような重い口調でそう言った。
「実はさ、私も最近バンド組んだんだ」
「人見知りの菖蒲がよくメンバー集めれたな」
菖蒲は一瞬むっとした表情を作ったがそのことに言及はせず言葉をつづけた。
「しかし、ドラムだけがまだいないんだ……」
徹はすぐにベースを見つけているだろうと高をくくっていた菖蒲だった。
「ドラムはギターとかに比べると少ないからな」
「知り合いにフリーのドラマーとかいないのか？」
「いない……、というよりそれほど顔広くないし」
「ふむ……」
そういって菖蒲は黙り込み、腕を組んで考えるそぶりを見せた。そして膝を打って言った。
「よし、ナオ、うちのバンドに入れ」
「……もう組んでるって」
菖蒲の言葉を予想していたのか呆れた様子で直也は言った。
「他のドラムが見つかるまでいいから、掛け持ちでもいいから。兎に角早く活動を始めたいんだよ」
「うーん……」
「別にそっちのバンドで毎日練習してるってわけでもないんだろ？」
「まあ、週一だけどさ」
「よし、じゃあ決定！」
「……まあいいか。ぶっちゃけ最近少し暇してたし。なんてバンド名？」

「えっ？　いや、まだ……」
「どんなジャンル？」
「それも、まだ……」
「コピーするバンドとかは？」
「まだ……」
「なんにも決まってねえじゃないか！」
直也はまたも呆れたように言った。
「……これから決めるんだよ」
思えばバンドを組んだはいいがまだ徹とはその方向性など一切話しあってないことに今更ながら菖蒲は気がついた。
どんな音楽をやりたい？
菖蒲には取り立てて好きな音楽というものはなく、わけ隔てなく聴いてきた。皆が聴いているようなメジャーのＪ‐ＰＯＰの曲から、余り人に知られちないマイナーなインディーズのアーティストの曲まで、ただ、演歌やクラシックといったものは余り聴かなかった。
「……まあ、取り敢えず、今度一回集まろう」
菖蒲は取り繕うようにそういった。
「ああ、じゃあ顔合わせの日決まったら連絡くれ」
そのころちょうど互いの母親達の話も一段落したようだった。
「直也、帰るよー」
「ああ」
そして直也と叔母は家を後にした。
「ふう、しかし……」
取り敢えずドラムが見つかって一安心した菖蒲だったが、自分はバンドというものについて何も分かっていないという事実に気がついた。今まではただ歌えればいいと思っていたが、そうじゃない。ギターがいて、ベースがいて、ドラムがいて、そしてヴォーカルがいて、そして初めてバンドという形を成しているのだ。
バンドとして、どう活動していくか、まだ色々考えることがありそうだと菖蒲は思った。

ドラマー（後書き）

やっとバンドメンバー全員を登場させることができました＞＜

顔合わせ

街中にあるとある有名チェーン店のファミレス。その店内に六角徹、中村菖蒲、一ノ瀬珪、片山直也の四人は顔を合わせて座っていた。

「……」

その雰囲気は重苦しく誰も言葉を発しようとしない。

どうしたものか、と徹は悩んだ。

徹がベースを見つけたこと、菖蒲がドラムを見つけたことを二人はそれぞれ報告し合った。

「じゃあ、取り敢えず今後の活動の方針とかの話し合いも兼ねて顔合わせをしよう」

と菖蒲が提案し、徹と菖蒲はそれぞれの相手に都合のいい日にちを聞き、そして今日、このファミレスに集まることになった。

徹は珪を引き連れて集合時間の五時より数分前にファミレスについた。着くと同時に携帯が震えメールが来たことを知らした。

「ごめん、一ノ瀬さん。後の二人少し遅れるみたいだって」

「こんなんじゃ先が思いやられるね」

「ごめん、なんかドラムの人違う学校の人らしいから……」

珪はそれとなくいっただけだったが徹は二人をフォローするようにそう言った。

何も注文しないは気兼ねしたので徹と珪はドリンクバーだけ注文した。

「持ってくるよ、何がいい？」

ドリンクコーナーにあるコップを自由に使ってくれとのことなので徹は席を立ち、待たせていることへの罪滅ぼしも含めてそう言った。

「じゃあ紅茶お願い」

「分かった」

向かった先のドリンクコーナーにはミルクティとレモンティがあった。徹はどちらか迷ったが、余った方を自分が飲もうと二つとも用意した。
「ミルクティーとレモンティー、どっちがよかった？」
「あ、じゃあミルクで。なんかごめんね」
「いや」
まだ出会って浅い二人の間に会話は生まれず、約束の時間から約十五分遅れて菖蒲達がくるまで二人はちびちびと紅茶を啜っていた。
やがて店内に入ってきた菖蒲と直也を認めた徹は軽く右手を上げてこっちだと合図をした。
徹と、そして珪を見つけた菖蒲はなぜか一瞬むっとした表情をした。
「？」
一応時間に遅れてきたのだから少しは申し訳なさそうな顔をして入ってくるかと思っていた徹は逆の表情をされて戸惑った。
「あ、ドリンク頼む？」
自分と珪だけ飲み物があるおは忍びなく思い、席に着いた二人に向かって徹は言った。
それに対し二人は無言で頷いた。
徹は通りかかった店員にドリンクバーを二つ追加で頼んだ。
「あ、あそこで自由に取ってきていいから」
二人はまたも無言で立ちあがりドリンクコーナーへと向かった。
なぜ菖蒲と直也の二人がこうも不機嫌な様子かというと数分前――
「遅い！」
「しかたないだろ、俺の学校から遠いんだよ！」
「初日から遅刻じゃ示しがつかないだろ」
「なんだよ、仕方なく加入してやるってのに」
と、したちょっとしたいざこざがあったのだった。

それにしても、「ドラムの人、派手だなあ」と徹は思ったが、菖蒲の知り合いだから、という理由で妙に納得してしまった徹だった。
菖蒲と直也がそれぞれドリンクを持って席に着いた。これでやっと話し合いを開始できると徹は一息ついた。
「……」
沈黙。
（あれ？）
徹はてっきりバンド発起人である菖蒲が進行を進める者とばかり思っていたが、等の菖蒲はムスっとした顔でドリンクを啜るばかりでまるで話を始まる様子がない。
ここは自分が話を進めるべきだろうか、こんなんじゃ始まる前からバンドが解散しかけない。そう思い徹は話を切り出そうと試みるが中々タイミングがつかめずおろおろするばかりだった。
「えーと、なんかよくわかない雰囲気だけどとりあえず自己紹介から始めましょう。私は一ノ瀬珪、担当はベース、パンクでもポップでもラウドでも何でも好きです」
この重苦しい雰囲気の中口火を切ったのは珪だった。
会話を絶やさないように次に口を開いたのは徹だった。
「あ、六角徹。ギターです。ブルーハーツが好きです」
「中村菖蒲、ヴォーカル。音楽全般なんでも聴く」
「片山直也、ドラム。V系はあまり好きじゃない」
徹に続いて菖蒲、直也が渋々といった様子でそれぞれ自己紹介をした。
それにしても見掛けが一番ビジュアル系っぽい直也がV系を嫌いとは意外だと徹は思った。
「えーと、じゃあ次に練習する曲だけど、何かやりたい曲とかある？　最初は何か簡単な曲――、さっき徹が言っていたブルーハーツの曲なんかは簡単でいいと私は思うけど」
初対面の二人を前にして堂々と進行役をしてくれる珪に徹は感謝した。しかしいきなり自分のことを名前で呼ばれた時は少しどきり

とした。
「リンダリンダぐらいしか知らないけど……、別にいいよ」
「まあ、最初はそれぐらいがいいんじゃないか」
二人とも了承した様子だった。
「徹はそれでいい？」
「あ、うん」
そして珪は最後に徹の了承がとり、話を進めた。
「じゃあ、最初の練習の曲はブルーハーツということで。曲は、取り敢えず中村さんが言ったリンダリンダと、私は青空が好きなんだけどそれでいい？」
菖蒲と直也は頷いた。が、青空という曲を知らない様子だ。
「二曲じゃ少ないかな。徹、何かもう一曲何かない？」
「じゃあ、終わらない歌」
少し考えて徹はそう言った。
「うん、いいね。と言うわけでリンダリンダ、青空、終わらない歌、で皆さんいい？」
僕たち三人は頷いた。
こんな感じで、バンドメンバーの顔合わせは終了した。
これからうまくやっていけるのだろうかと、徹は不安を隠せないでいた。

顔合わせ（後書き）

感想、一言、アドバイスなどありましたら気軽にお願いします^^

スタジオ『Ｋｅｙ』

「あ、いたいた」
そう言って徹のいるクラスへと入っていたのは珪だった。
女子にしにしては高い身長、長く綺麗な黒髪、そして整った顔立ち、そんな珪の存在はクラスのほとんどの男子の視線を奪った。
「おはよう、徹」
「おはよ……、珪」
始め、徹は珪のことを一ノ瀬さんと呼んだが、菖蒲のときとどうようこれからバンドを組む仲なのだから名前で、呼び捨てでいいと正されてしまった。
「ねえ、持ってきてくれた？」
「ああ、うん」
徹は机の中からバンドスコアを取り出した。
昨日、このあいだ決めた曲の楽譜があったら貸してくれと珪からメールがあったのだ。
「うん、ありがと」
珪は用を済ませると、すぐに教室から立ち去って行った。それにしても他のクラスだというのによく堂々と振舞えるものだと徹は思った。
「おい」
「ん？」
声の主は友人の田辺だ。
「今の誰だよ」
田辺は怒気を含ませた声で言った。
「うん、ちょっと……友達」
なんとなく、まだバンドをしているということは知り合いに言いたくなかった。
「名前は！」

声がでかい。徹はうんざりした。
「……一ノ瀬さん」
「クラスは！」
「……でぃー」
「もしかして……、付き合ってるとか？」
「いや」
「ふう、よかった。もし首を縦に振っていたら理不尽な暴力を奮わなければいけないところだった」
「……」
朝からこのテンションに付き合うのは少し疲れると徹は思った。
やがて担任の教師が来てショートホームルームが始まり、終わり、授業が始まって十数分後にやっと菖蒲は教室に顔を見せた。

『昼休み、屋上』
お決まりの文が菖蒲から徹の携帯にとメールで送られてきた。宛先には徹の他に珪のアドレスもあった。
昼休み、徹は素早く昼食を食べてから屋上に上がろうと思っていたが、菖蒲が先に教室を出て行ったため、急いで弁当をしまい、菖蒲の後を追った。
「さて、集めた御用は？」
珪が煙草をふかしながら菖蒲に尋ねた。菖蒲も当然のようにポケットから煙草とライターを取り出し慣れた手つきで火を付けた。
「えーと、この前の話し合いで練習場所って決めてなかったと思うけど……、その、どうするの？」
「ああ、そういえばそうだったね」
失念していたように珪が言った。
「スタジオなら近くに何個かあるよ」
と徹。
「あ、一応直也にいつもどこ使ってるか訊いてみて、『Ｓｔｕｄｉｏ Ｋｅｙ』って所が料金も安くていいって」

「ふふ、実はそこの『Ｋｅｙ』の読みかたは『キー』じゃなくて『ケイ』なんだよ」
「へー、詳しいね」
「実は……」
恥ずかしげに珪は続けた。
「そこ、私の家なんだよね。『ケイ』ってのは私のこと、珪」
「「えっ！」」
徹と菖蒲の驚きの声は見事にかぶった。
「本業とは別に父親が趣味でやってるの。楽器の修理と貸しスタジオ。昔からうちの親は二人とも音楽が好きで」
「……すごいお父さんだね」
「だからうちならスタジオ代は無料でいいと思うよ。帰ったら一応また訊いてみるけど」
「いいの？　それは、ありがたいけど」
「いいの、いいのどうせ道楽でやってるんだし」
「えーと、じゃあそこで決定、で」
煙草をもみ消しながら菖蒲は言った。
「オーケー」
「わかった」
昼休みも半分が過ぎたころ、バンドの練習場所が決まった。
「あ、徹、楽譜今日中に返した方がいい？　だったら購買でコピーしてくるけど？」
「そんなに急がなくてもいいよ、僕はもう弾けるから」
「へえ、もう全部練習したの？　偉いね」
「じゃっ」
徹と珪が話す中、菖蒲は短くそう言って屋上を降りて行った。
「ふむ、ちょっと無愛想な子だね。ヴォーカルは歌はもちろん場を盛り上げるのも必要なのに」
「きっと、僕達はまだ出会ったばっかりだし、緊張してるんだよ」
「あれって緊張してるの？」

「うん、たぶん。ちょっと不器用なだけだよ」
「ふーん、まあ別に嫌いってわけじゃないから、そんなに庇い立てしなくてもいいよ」
「別に……」
図星だったので徹は二の句が継げずにいた。

初練習

菖蒲率いるバンドの四人は『スタジオＫｅｙ』に集合し、初めての練習を始めようとしていた。

珪と直也は慣れているせいか、テキパキと準備を進めるがスタジオが初めての菖蒲と徹は初めての空間に戸惑っていた。

徹は家にあるアンプを大きさが違うだけなのでなんとか勝手がわかっていたが菖蒲はさっぱりだった。珪にマイクを渡されたものの、もちろんこのまま歌ったところで音が出るわけがない。それは分かっていてもどうすればいいのか菖蒲はさっぱり分からなかった。

「あ、分からない？　じゃあやっておくよ」

「ありがと……」

いち早く準備を終えた珪は菖蒲からマイクを受け取った。

手持無沙汰になった菖蒲は準備をする徹に向かって言った。

「それ、何？」

菖蒲は徹の足元に置いてあるオレンジ色をした筐体を指さして言った。

「えっと、エフェクター」

「……何、それ？」

エフェクターを知らない菖蒲は再度問いかけた。

「オーバードライブ、だけど……」

勘違いした徹はエフェクターの種類を答えた。

「……」

「……？」

二人のやり取りを横から見ていた珪はやれやれと言った様子で菖蒲に説明した。

「それはエフェクターと言ってギターの音色を変えるもの、で菖蒲が指さしているそれはオーバードライブってエフェクターで音を歪ませるもの、因みに横の黒いのはチューナー」

「ふーん、どうなるの？」
「あ、今やってみるよ」
徹は急いでギターからエフェクター、エフェクターからアンプへとシールドを繋いだ。
アンプのスイッチを入れ、ゲインを上げてジャラーンとEのコードをクリーンで鳴らした。
「これが、まあ普通の音」
かちっ、と足元のエフェクターを踏み込みもう一度Eのコードを鳴らした。
「これがオーバードライブ」
「へえ、すごいな……」
二つの違うギターの音を聞き比べて菖蒲は素直に感心しているようだった。
「バンドやろうって人間がそんなことも知らなかったのかよ」
ドラムのスティックを回しながら直也が茶々を入れた。
「しかたないだろう、ギターなんか触ったことなかったんだから」
「まあまあ、みんな準備終わったみたいだし、早速練習しましょうか。じゃあまず、リンダリンダ」
珪の一言によりバンドの初めての練習が開始された。
クリーンギターとボーカルから始まるこの曲、徹がギターを優しく響かせそれに合わせて菖蒲がゆっくりと歌いだす。その歌声に珪と直也が顔を上げ、目を見張る様子に徹は気付き、嬉しくなった。
そしてサビ。
ドラムとベースが混ざり、ギターは音を歪ませ、ヴォーカルは声量を上げた。
徹は思わず笑みが零れた。
楽しい。
一人で弾くのとは全く違う。ギターが、ベースが、ドラムが、ヴォーカルが、全ての音が合わさって曲を成している。
普段は仏頂面の菖蒲も笑っている。

徹と菖蒲は今同じ気持ちだった。
（これがバンドか！）
やがて曲が終わった。皆かるく息を弾ませている。暫く誰も言葉を発することなくノイズと皆の息をする音だけがスタジオに響いた。
「次、行こうか？」
珪の言葉に皆頷いた。
他の二曲を続けて演奏した。
演奏中、皆は思わず笑顔になった。珪と徹は音に合わせて踊るように楽器を振り回した。
演奏を終え、音が止んだ時には皆汗だくになり、肩で息をしていた。
途中、少しずれたりすることはあっても誰もとちることなく曲は演奏された。直也は自分のもう一つのバンドの初めての練習の時を思い出した。最初のイントロからずれまくり、途中ギターは走りすぎる、ベースはピッキングが弱く全く聞こえない、自分のまったくリズムが安定せず、ヴォーカルは入りだしを何度もミスする。思い出しただけで恥ずかしいことだった。
しかし、今目の前にいる三人はそんなことは一切なく皆本当に始めてかと疑いたくなるほどだった。
特に驚いたのはヴォーカルだった。
こんなによくヴォーカルの歌が聴きとれたのは初めてだった。いつもの練習では他の楽器にかき消され、届くヴォーカルの音など微々たるものだった。
直也はふと思いつきミキサーのヴォリュームを確認してみた。目盛は自分のバンドのヴォーカルのいつもの設定より僅かに左に傾いている。それを見てさらに驚いた。
（なんて、声量だ……！）
珪も菖蒲のヴォーカルには少し驚いた。
「何かやってたの？」
珪が菖蒲に尋ねた。

「何か、って？」
「ボイトレとか、演劇とか」
「いや、何も」
「そう……」
菖蒲はなぜそんなことを訊かれるのか訳が分からないと言った顔をしている。タオルで汗をぬぐい、買ってあった水でのどを潤した。表情は相変わらず冷めているが内心では楽しくて、楽しくて、かなり高揚していた。
「もう一回、いい？」
菖蒲が皆に向かって言った。
「もちろん」
「オーケー」
「うん。細かいミスが何個かあったし、リズムも途中変なとこがあったからそこんとこ気を付けて」
徹、直也がそれに応え、珪はアドバイスも加えた。
その後、時間が尽きるまで四人は音を響かせた。

屋上にて

バンドの練習は週に一回、毎週水曜日に、みんな都合がいいということでその日に決まった。

毎週一曲ずつ新しい曲をコピーしていくことになった。どの曲をコピーするかは毎度話し合って決めた。しかし極力順番に一人ずつやりたい曲を優先させていた。

「次は９ｍｍがやりたい」

練習も終わりに近づいたころ直也が言った。今週は直也が優先的に曲を決める週だった。

「ギター一つじゃきつくない？」

珪が言う様に『９ｍｍ』はツインギターのバンドで曲にもよるが一つのギターでは無理があった。

「じゃあ、ニルヴァーナ」

「うん、それならギター一つでもできるかな。徹、ニルヴァーナわかる？」

「うん、少しは」

「菖蒲は？」

「……わかんない」

菖蒲は聞いたこともないアーティスト名に戸惑った。

「カート・コバーンのバンドだよ。『Ｓｍｅｌｌｓ　Ｌｉｋｅ　Ｔｅｅｎ　Ｓｐｉｒｉｔ』とかは有名だから聴けば分かると思うよ。この曲でいい？」

「ああ、いいよ」

問いかけられた直也は頷いてそう言った。

「じゃあ決定ね」

話も終わったころ、練習時間も終わろうとしていた。

「じゃあ、おつかれ」

珪はそう言って皆を見送った。
三人はそれぞれに「おつかれ」と声を返した。
直也は電車に乗って帰宅、徹は自転車、菖蒲の家は近くなので徒歩で来ていた。
徹と菖蒲は途中まで帰り道が一緒だった。その途中まで徹は自転車を押して菖蒲と一緒に帰っていた。
「ニルヴァーナってどんなの？」
横を歩く菖蒲が問いかけてきた。
「うーん、僕も詳しくは知らないけどジャンルはグランジっていってロックのうちの一つ。意味は『汚い』とか『薄汚れた』とか。どんな曲かって訊かれたらちょっと説明し辛いかな……、実際に聴いてみたらいいよ」
「もしかして洋楽？」
「うん、そうだよ」
「ふーん」
「あまり洋楽とか聴かない？」
「ビートルズくらいしか」
「あ、僕もビートルズ好きだよ。今度やろうよ」
「そうだな」
「……」
「……」
毎度のことながらあまり会話は弾まないまま分かれ道に差し掛かった。
「じゃあ」
「うん」
会話がなくても別に二人とも気まずいとは感じなかった。むしろその静寂が心地よく感じられた。
昼休み、菖蒲、珪、徹の三人は屋上に集まるのが習慣になっていた。

「バンド組んでもうはや二ヶ月か、あっというまだね」
「そうか、もう二ヶ月か」
珪と菖蒲は相変わらず堂々と煙草を吸っている。徹は煙を浴びないよに二人の風上へとそっと移った。
「ねえ、煙草って咽喉に悪くないの？」
ふと心配に思った徹は二人に訊いた。
「さあ……」
「まあ、良いってことはないだろうね。私も詳しいことは知らないけど、愛煙家のヴォーカルって結構いるから大丈夫なんじゃない？」
素っ気ない答えの菖蒲、珪の答えも曖昧なものだった。
「吸ってみる？　あまり、おすすめはしないけど」
そう言って珪は徹にセブンスターの箱を差しだした。
徹は一瞬戸惑った後、恐る恐る箱に手を伸ばし一本抜きとって珪に箱を返した。
「ん……」
ぎこちなく煙草を口にくわえると菖蒲がオイルライタを面前に持ってきて、火を付けた。煙草を火の中に入れても中々火がついた様子がなく徹は変に思った。
「息を吸いながらつけるんだよ」
菖蒲の言う通りにそっと息を吸ってみると口の中に煙が充満していくのが分かった。そして煙をそっと吐き出して見た。
「……以外となんともない」
「はは、ちゃんと肺までいれないと。軽く深呼吸するみたいに吸ってみて」
再度煙草を咥えて珪の言うとうりにしてみた。
「――！　ゲホッゲホッ！」
「ははははっ」
咳きこむ徹を珪と菖蒲は二人して笑った。
「何、これ……」
「まあ、始めはそんなものだよ。これちょっと強いやつだし」

徹は手元のそれを苦い表情で見つめた。
「吸う？」
まだ長い煙草をもったいないと思い、どうせなら珪に返そうと思った。
「え……、じゃあ」
「……」
少し顔を赤らめて珪は煙草を受け取った。それを見た菖蒲はそっぽを向いて二本目に火を付けた。
やがて二人とも煙草を吸い終わり、昼休みを残り少なくなったころ、珪が唐突に言った。
「ねえ、ライブしない？」
その台詞に徹と菖蒲は目を丸くして固まった。

命名

「えー、以前、徹と菖蒲の二人にはちらっと言ったかもしれませんが、ライブとしたいと思います！」

スタジオでの練習が終わり、外に出ると珪が声高らかにそう宣言した。

「……」

徹と菖蒲はただ押し黙っている。

「ライブだって！？」

「別にそう驚くことでもないでしょ。もうこのバンド組んで二カ月ぐらい経つわけだし、自分で言うのもなんだけど私達、そんなに下手じゃないと思うよ」

「まあ、別にいいけどよ。で、いつ？」

「大体、一月後」

「もしかして、『Ｈｉ　Ｓｃｈｏｏｌ　Ｒｏｃｋ』か？」

「そうそう」

「あまり思い出したくないな……」

「あの、『Ｈｉ　Ｓｃｈｏｏｌ　Ｒｏｃｋ』って？」

珪と直也が話す中、聞き覚えのない単語を耳にした徹は二人に尋ねた。

「ああ、『Ｈｉ　Ｓｃｈｏｏｌ　Ｒｏｃｋ』ってのはライブイベントの名前。Ｒ（アール）ってライブハウス知ってる？　そこで大体二月に一回のペースで行われてるの。そのライブの出演者は主に高校生や若い年齢のバンド。私たちはそれに出ようっていうわけ」

「へえ……」

「ライブか……」

菖蒲が何処か違う世界の事のように呟いた。

「どう、みんな？　ライブに出る気はある？」

「まあいいよ」

直也はすらりとそう答えた。
徹も一拍遅れて首を縦に振った。
「……」
菖蒲は迷っていた、いや、恐れていた。
ライブ、というからには多くの観衆の前で演奏しなければいけない、自分にそんなことができるのだろうか？　人前で話す事さえ苦手な私が……。
ふと、顔を上げると三人が心配そうに自分を見ているのに気がついた。
そうだ、今はもう一人じゃないんだった。
「分かった、出る」
菖蒲は覚悟を決めてそう言った。
「よーし、全員一致でライブ出演決定！　まあ、細かいことは私に任せといてよ。Rの人とは知り合いだし、ノルマとか軽くしてくれるかもしれないよ」
「それは助かるな」
「……ノルマ？」
またしても菖蒲と徹はなんのことか分からず、首をかしげた。
「あ、そういえばさ」
徹が三人に向かって言った。三人は同時に徹の方を見た。
「名前……、バンドの名前ってどうする？　ライブに出るからには何か名前がいるんじゃない？」
「「「あ……」」」
みんな今更ながらに気がついた。未だにバンド名を決めていなかったことに。

その後、四人はバンド結成時に集まったファミレスに来ていた。
「えー、それでは、バンド名を考えよう会議を始めます」
練習後のせいか、気だるい口調で珪はそう宣言した。
「何か案のある人は？」

「……」
「……」
誰も口を開こうとはしない。
「はあ……、名前って言うのは大事だと思うのね、私は。名は体を表すという様に、私達四人の代名詞になるわけだから、あまり変なのは私嫌だよ。そしてなるべくなら人に覚えられやすい名前がいいと思う」
「そういえば直也、お前のもう一個のバンド名はなんていうんだ？」
参考までにと菖蒲は向かいに座る直也に尋ねた。
「……『ブラック・エターナル』」
「……どういう意味？」
尋ねる菖蒲に対して直也は口を開くことなく目を背けた。
「えっと、黒い永遠？　不屈の黒？」
代わりに応えたのは徹だった。
「できれば、なんか格好いいからって理由で適当に決めた少し痛い名前は避けたいところです」
珪が辛口にそう言った。
「俺が決めたんじゃねえよ……」
直也が恥ずかしげにそう呟いた。
「ええ――、では改めて何か案のある人――、徹、何かない」
「えっと……」
急に振られて戸惑った徹は目を泳がせた。その視線はふと菖蒲を捉えた。
そして徹はじっと菖蒲を見つめた。
「何だよ」
「……『ブルー・フラッグ』」
徹の呟きと共に珪と直也の視線が菖蒲の髪――すっと線を引くように青く染めたメッシュ、それは二人の目には棚引く青い旗のように見えた。
「ははははははっ！」

「あはははははははっ！」
直也と珪は同時に噴き出すように笑いだした。
「なんだよ！」
いいなり自分を見て笑われた菖蒲は思わず両手で頭を隠した。
「うん。いんじゃない。いいセンスだよ」
珪はまだ笑いながら徹を誉めた。
「あと、菖蒲――」
「何？」
笑われたことで菖蒲の声には怒気が含まれていた。
「あ、いや花の菖蒲の中には『ブルー・フラッグ』って呼ばれてる種類があるから……、思いついたんだけど」
「へえー、本当に？　これはもう『ブルー・フラッグ』で決定だね。なんかいいよね二つの意味があるっていうの。菖蒲、髪型変えたらだめだよ」
「うるさい！」
実際に四人のいるテーブルは騒がしく、他の客の注目を集めていた。
「えー、では、バンド名は『ブルー・フラッグ』で皆さんよろしいですか？」
「おう」
「うん」
「……なんか嫌だけど、まあいいよ」
不承不承ながら菖蒲はそう言った。
そうして四人のバンド名は『ブルー・フラッグ』に決定された。

曲

昼休み、いつものごとく菖蒲と珪は煙草をふかし、かわりに徹は缶コーヒーを啜っていた。
「ねえ、オリジナルしない？」
煙草をもみ消した珪が二人に言った。
「オリジナル？」
二人はなんのことなのか分からなかった。
「そんな曲あったっけ？　だれの曲？」
「……これ？」
そう言って菖蒲が指さしたのは徹が飲んでいた缶コーヒーのジョージア・オリジナル……。
「いや、あの、だからオリジナル曲。私たちのバンドの」
珪は心底呆れていた。
「えーと、自分たちで作詞、作曲するってこと？」
「そう」
「……」
二人は無言で首を横に振った。
「ライブって、絶対オリジナル一曲はしないとだめとかあるの？」
「そんなことはないよ、高校生バンドとかだと全部コピーとかざらだし。でも、折角ライブするんだし、一曲ぐらい自分達の曲やりたくない？」
「それは……、珪、作れるの？」
「まあ、たぶん。作詞はしたことないけど。というわけで作詞はヴォーカルの菖蒲におまかせします」
「えっ……、私だって詩なんか書いたことない」
「大丈夫、大丈夫、誰にだって最初はあるよ」
「……」
菖蒲は黙り込み、明らかに嫌そうな顔をした。

「まあ、一応考えるだけ考えておいてよ」
「……わかった」
ちょうど昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。
「あ、やばい。戻ろ、戻ろ」
三人は駆け足で屋上を後にした。

放課後、珪は徹と菖蒲のクラスに顔を出した。
「徹、今日暇？」
「うん、特に何も」
「そう、じゃあうち来て。早速作ろ」
「あ、うん」
「じゃあ、先行ってるね」
要件だけ伝えると珪はすぐに教室から出てった。
放課後とはいえ、授業が終わってまだ差ほど経っていなかったので教室には多くの生徒が残っていた。そのためいきなりの闖入者の珪、そして珪と離していた徹は少し注目を浴びていた。
「おい、誰だよ今の？」
友人の石川が怒気の含んだ声で徹に尋ねた。
「えっと、友達」
「家に行くとか、どうとか……、まさか付き合ってるのか？」
「いや、違うよ。えーと、音楽の趣味が合って、それでＣＤ貸りにいくだけ」
とっさにしてはましないい訳ができたなと、徹は思った。
「そうか……」
まだ少し納得できないような様子の石川だったが、今日のところは引き下がって行った。
菖蒲が教室を出て行くところだったので徹は急いで支度を済ませ、追う様に教室をでた。
「あの、一緒に行く？」
「……いや、作曲とかわかんないし」

「そう」
なんとなく不機嫌そうな感じだったので徹はそれ以上声をかけなかった。

「や、いらっしゃい」
「おじゃまします」
徹はギターをもって珪の自宅――『Ｓｔｕｄｉｏ　Ｋｅｙ』へと訪れた。
「じゃあ、早速作ろうか」
珪はベースをもってスタジオの方へと向かった。
「いいの？　使って？」
「うん？　いいよいいよ、今日はどこも入ってないから」
いつもは少々狭く感じていたスタジオの中だったが、二人きりだと広いなと徹は思った。
狭いこの空間で女の子と二人きりなんだと、意識して思うと妙に緊張した。
「最初だし、そんなに難しいこととかは考えずに気軽に作ろうよ」
「うん」
といっても、徹は作曲などしたことがなかった。
「じゃあ、キーはとりあえずＦで作ろうか。何だったら菖蒲の音域に合わせてまた変えればいいし」
「う、ん……？」
キーをＦ、とはどういうものなのか徹は理解できていなかった。
「スケールぐらいはわかるよね？」
「あ、うん」
「Ｆから初めて外れなければいいの。まあ大雑把に言うと不協和音にさえならなければいい」
珪は紙にＦのキーで使う基本的なコードを書きだした。
「このコードで曲を作る、はい、それだけ！」
「う、うん！」

それから二人はコード進行、ベースラインを考え。ララで適当に歌ってメロディを作って行った。その一つ一つをボイスレコーダーで録音していき、最終的にいいとおもったものを繋ぎ合わせた。
二人は時を忘れた一心不乱に曲作りに向かいあっていた。無から何かを作りだす喜びを感じていた。
さすがに疲労を感じて、何時だろうと時計を見ると既に九時を回っていた。スタジオに入って四時間以上経っていたことになる。
「え、もう九時過ぎ？」
「うん」
「夢中になってたね。ああ、すごいおなか減ってる。大体形はできたし、今日は此処までにしようか」
「そうだね」
二人はスタジオから外にでた。そして自販機でジュースを買って一息ついていた。
「どう？　作った曲」
「うん、良い感じだと思うよ」
「そうだね、自分たちで作ったものにしてはいい曲だと思う。あとはドラムと歌詞か……」
二人は飲みほした空き缶をゴミ箱に捨て、別れを告げた。
「じゃあ、もう遅いし、また明日」
「うん、お疲れ様」

悲しみの在処

朝、徹が登校すると教室には既に菖蒲の姿がった。
菖蒲は徹の姿を認めると席を立ち、歩み寄り、一枚の紙を渡した。
「ん？」
徹が中を開こうとすると菖蒲は顔を赤らめ、脱兎の勢いで教室を飛び出していった。そして授業が始まっても菖蒲が返ってくることはなかった。
授業中、徹は受け取った紙の中を開いた。

『悲しみの在処』

上の方にそうタイトルが記されていた。その後には菖蒲の文字で文章――詩が綴られていた。
徹はゆっくり、丁寧に一文、一文を読み進めて行った。

泣いても哭いても涙つきても
悲しみは身体の何処かにあって
溜まり溜まったその悲しみを
吐き出す術が分からないから

今にも心が弾けそう

悲しみ溢れて涙になっても
消えて行くのは水の塩で
行き場をなくしたこの悲しみは
この身に張り付いて剥がれないから
嫌なこと全部わすれてしまえたら

望まなかった明日も欲しくなるかな

どこか物悲しい歌詞だった。『悲しみ』という単語が幾度も出てきたのに徹は気がついた。きっと適当に書いた詩ではないということがなんとなくだが察しがついた。
普段の様子からではわからなかったが、菖蒲は深い悲しみを抱えているのだろうか。徹は少し心配に思った。
昼休み、菖蒲は結局返ってこなかった。
屋上には一人欠いて徹と珪の姿があった。
「あれ、今日は菖蒲休み？」
「あ、うん。朝はいたんだけど、ちょっと調子が悪いとかで早退した」
「大丈夫なの？」
「うん、たぶん大したことないと思うよ」
おそらく詩を見られるのが恥ずかしいから逃げ出したのだろう、と徹は理解していたが菖蒲の名誉のために少し嘘をついた。
「あと、これ」
「ん？」
「菖蒲が描いた詩」
徹は詩が書かれたノートの切れ端を珪に手渡した。
「へぇ、書いてきたんだ。どれどれ」
珪は煙草に火を付けて紙に目を落とした。
ずいぶん長い間、珪は紙を見つけていた。そして煙草を揉み消すと同時に顔を上げた。
「うん、ちょっと悲しげだけどいいんじゃない。切実に悲しみが伝わってくる」
「うん……」
「じゃあ早速今日、この歌詞を曲に組み込もうか」
「え、今日？」

「何か予定ある？」
「いや、特には……」
取り立て放課後に予定はなかったが、昨日夜遅くまで曲作りに勤しんでいたので少々疲れが残っていた。
「じゃあ、また放課後うちで」
「……うん」
きっとまた夜遅くまでかかるのだろう。徹は覚悟を決めて返事をした。

放課後、徹は二日連続で珪のお宅兼スタジオへとお邪魔した。
「はい」
スタジオに入っていきなり珪が手渡してきたものは菖蒲の詩が書かれた紙のコピーだった。
「では、作って行きますか」
今日作った曲のメロディに菖蒲の詩を乗せて行った。コード鳴らしながら実際に歌ってみた。
作業は思いのほかスムーズに進み、菖蒲の詩はうまいことメロディにのっていった。しかし問題が発生した。
「うーん、どうしよう」
「どうしようか」
二人して唸っているわけは詩が少し短すぎたことにあった。一番と二番のAメロとBメロを作ったところで紙に書かれていた菖蒲の詩はほぼ全て使ってしまい、肝心のサビに乗せる歌詞が無くなってしまった。
「じゃあ徹、サビの歌詞よろしく」
「えっ！」
いきなりの無茶ぶりに徹はものすごい勢いで珪の方を振り返った。
「まあまあ、ジュースおごってあげるから」
そう言い残すと珪はスタジオを出て行った。
一人取り残された徹はシンと静まり返ったスタジオで途方に暮れ

た。
十分が経過し、二十分が経過しても珪は未だに帰ってこなかった。
ただ待っていても仕方ないと、徹は紙とペンを手に取った。しかしながら中々一文字目が書かれることはなく時間だけが過ぎて行った。やがて徹は諦めたようにペンを放りだした。そして代わりにギターを手に取った。
作った曲を、菖蒲の詩を、ギターを弾きながら最初から歌っていく。やがて空白のサビに差し掛かる。しかし徹は止まることなく歌い続けた。自然と言葉が溢れ来た。ペンを持っていた時とは打って変わって次々と言葉が湧きあがってきた。
歌い終わると徹はすぐさま先ほど放り投げたペンを拾って忘れないうちに紙に書きとめた。
「首尾はどうだい？」
そしてタイミングを見計らったように珪が缶ジュースを携えて帰ってきた。
「一応、出来た、かな……」
「ほう、偉い偉い、はいこれ。本当は飲食禁止なんだけどね」
「ありがと」
よく冷えた炭酸飲料は疲れ切った心身に染みた。
「じゃ、早速訊かせてもらおうか」
小休止を終えると珪は言った。
「うん」
徹はギターを持つと少し照れながら今しがた出来たサビの部分を歌った。
聴き終わった珪はニッと笑って言った。
「いいね。それでいこう」
いきなり合格をもらえた徹はあっけらかんとなった。
「じゃあ最初から通してやってみようか」
「うん」
その後曲の形を固めて行って、やがて曲は完成に近づいた。

スタジオを出た時刻は昨日より遥かに遅くなった

悲しみの在処（後書き）

久しぶりの更新となりました＞＿＜

THANKS

今日は水曜日。スタジオ練習の日だった。
放課後四人はスタジオに集まった。
「えーでは発表したいと思います」
珪が少し恥ずかしげに言った。
予め直也と菖蒲には曲が大体完成したとの旨を伝えてあった。徹も緊張し、ギターを握る手は微かに汗ばんでいた。
「じゃあ直也、ＢＰＭ１６０ぐらいで適当に刻んで」
「おう」
まず直也が一人でドラムをたたき始めた。徹と珪はアイコンタクトでタイミングを見計らい、曲を始めた。

泣いても哭いても涙つきても
悲しみは身体の何処かにあって
溜まり溜まったその悲しみを
吐き出す術が分からないから

今にも心が弾けそう

いいよ、
僕が全て取り除くから
君の悲しみの在処教えて
僕がいつも傍にいるから
そんな曇り空の顔は止めて

取り敢えず一番の終わりまで演奏して徹と珪は演奏をやめた。
「……」
「……」

静寂。数秒、誰も言葉を発しなかった。
「ま、こんな感じです」
口を開いたのは珪。
「悪くはないと思うぜ」
次に直也。
「……」
菖蒲は未だに無言で思いつめたような、少し険しい顔をしていた。
「どう、かな？」
徹はそんな菖蒲に問いかけた。
「ん……、いいんじゃない」
「そう？　よかった」
「歌詞は……、あのサビの歌詞は？」
自分の歌詞に勝手に付け加えられて怒っているのか、徹はそう思って不安になった
「えっと――」
「あれは徹が書いたんだよ。ごめんね、勝手に付け加えて。でもどうしても足りなくてさ」
言い淀む徹の代わりに珪が言った。
「いや……、構わない。そうか……徹が書いたのか」
菖蒲は少しうるんだ瞳で徹を見据えた。
「……うん」
少なくとも菖蒲は怒っている様子はない。徹はそう思って安心した。
「あ、そうだ」
珪は自分の鞄を漁り二枚のＣＤを取り出した。その白いＣＤには『悲しみの在処』と小さくマジックで書かれていた。
「取り敢えずデモ音源作ったから、ドラムは入ってないから直也は考えてきて。菖蒲はメロディ覚えてきてね」
そういってそれぞれ一枚ずつ手渡した。
「オーケー」

「うん……」
菖蒲は受け取ったCDを神妙な面持ちで眺めた。
「じゃあ今日は取り敢えず今までの曲を練習しようか。ライブまでそんないないから気合入れてね」
珪がそう言って、練習が始まった。
ライブが近いこともあってみんないつもより気合が入っていた。
練習が終わり、みんなが後かたずけをしているときに菖蒲が徹に近づき言った。
「サビは、徹、お前も歌え」
「え、どうして？」
「お前が作った歌だろう」
「えーと、ごめん。やっぱりサビも自分で作りたかった？」
勝手にそう解釈した徹はそう言った。
「違う！」
それを菖蒲はすごい勢いで否定した。
「サビはあれでいい、取り敢えず、一緒に歌え」
「いんじゃない？　サビだからヴォーカル増えて盛り上がった方がいいだろうし、徹そんなに歌下手じゃないし」
やり取りを聞いていた珪が横からそう言った。
「うん、じゃあ練習しておくよ」
徹は了承したものの菖蒲の声を邪魔してしまわないか不安だった。
お疲れ様、皆がそう言って解散した。
自転車に跨り変えようというところで菖蒲に呼び止められた。
「ん？」
「サビは本当によかったから……。どういうつもりで書いたのかはしらないけど……。ありがとう」
そう言うと徹の言葉を待たずに菖蒲は駆けて行った。
「ありがとう……」
余り深く理解しないながらも、徹はその言葉を心地よく感じた。

前夜

皆の中に気合と共に緊張が見える。
ライブの持ち時間は入りはけ含めて三十分。軽いＭＣなどの時間も考えて演奏する曲は四曲に決めた。
今日の練習は曲の練習はもちろんだが、始まる時、終わる時はどうするか、何処にＭＣを挟むか、など全体の進行の練習もした。持ち時間をオーバーしていないか全体を通して時間も測った。
気付くと時間は残りわずかとなっていた。この後に他のバンドの予約が入っていたので延長はきない。
「じゃあ、最後に通して終わろうか」
珪の一言に皆頷き、一曲目から最後の曲、『悲しみの在処』まで通して、ライブ前最後の練習は終わった。
スタジオの外では皆が神妙な面持ちで立っていた。
「さて、いよいよ明日です」
「うん……」
「そうだな」
「……」
菖蒲だけが言葉を発さない。四人の中では一番緊張しているようだった。
「ねえ、みんな。この後暇？」
いきなり珪がそんなことを言った。現在は七時過ぎ。明日はライブ当日なので無論皆は予定などいれている訳もなく。強いていうなればゆっくり身体を休める予定だった。
「ライブ行こうか」
そう言って珪が皆にチケットを手渡した。
「今日『Ｒ』で行われてるライブ。モチベーション上げるために見ておこうよ」
皆異存なく首を縦に振った。

「あっ！」
いきなり直也が声を上げた。
「どうしたの？」
「そういえばチケットのノルマとかいいのかよ？」
「うん、初出演だし、別にいいって」
「俺らは初出演だったけどちゃんとノルマあったぞ……」
「まあそこは、人脈？」
珪と直也の話が何の事なのか分からずただ黙っている菖蒲と徹だった。
「あの、前も訊いたけどノルマって？」
おずおずと徹が訪ねた。
「普通ライブに出演するためには各バンドにノルマが課せられるの。ノルマっていうのは要するにチケットを捌けってこと。枚数は二十枚だったり、三十枚だったり、まちまちだけどね」
「そうなんだ、よかったの？　払わなくて」
「ふふ、私のおかげ。感謝してね」
そうやって話しているうちにライブスタジオ『R』へとたどり着いた。
扉を開けた瞬間爆音が耳に飛び込んできた。
ステージでは四人組のバンドが演奏していた。
徹と菖蒲は圧倒されていた。何せ二人とも生のライブを見るのは初めてだったのだ。
二人は呆然と口を開いてステージに見入っていた。そして思った。明日、こんな所で自分たちが演奏するのか、と。
やがて演奏が終わりステージの四人は捌けて行った。
「今のバンドはラッシュって言って社会人のバンドだよ。といってもまだ若いけどね。このバンド目当てで来る客も結構いると思うよ」
珪がそう説明してくれた。
徹と菖蒲にとっては次のバンドも、その次の出てくるバンドも、まるでプロの様にうまいと思った。

やがてライブが終わり、ライブハウスに詰められていた客はぞろぞろと出口に向かった。四人もそれに倣って外に出た。
「どう？　モチベーション上がった？」
直也はいつもと変わらぬ様子だが、後の二人の表情は暗かった。
「どうしたの？　この二人は」
「二人とも、もしかしてライブ見たの始めてか？」
二人は頷いた。
「じゃあ、圧倒されたんだろ。俺も最初はそうだった。同じようにステージに立てるのかって」
二人はまたもこくこくと頷いた。
「大丈夫だって。明日初めてのライブは私達以外にもいたし。それに他人は他人。私たちはやれる事をやればいい」
「うん……」
そうはいってもまだ不安はぬぐい切れなかった。
徹は不安を抱えたまま家路についた。身体は疲れ切っていたはずなのに中々寝付けなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2658v/

青い旗の下で

2012年1月4日00時45分発行